

日本地質学会 *News*
Vol.28 No.10 October 2025



一般社団法人日本地質学会

The Geological Society of Japan

理 事

任期：2024年6月8日から2026年総会

会長（代表理事） 山路 敦（京都大学）

副会長 杉田律子（科学警察研究所）

星 博幸（愛知教育大学）

常務理事 亀高正男（大日本ダイヤモンドコンサルタント（株））

副常務理事 内野隆之（産業技術総合研究所）

執行理事 岩井雅夫（高知大学）

内尾優子（東京国立博物館）

大坪 誠（産業技術総合研究所）

尾上哲治（九州大学）

加藤猛士（川崎地質（株））

小宮 剛（東京大学）

坂口有人（山口大学）

高嶋礼詩（東北大学）

辻森 樹（東北大学）

細矢卓志（中央開発（株））

松田達生（工学気象研究所）

山口飛鳥（東京大学大気海洋研究所）

矢部 淳（国立科学博物館）

理 事 青矢睦月（徳島大学）

天野一男（東京大学空間情報科学研究センター）

磯崎行雄（東京大学）

大友幸子（山形大学）

岡田 誠（茨城大学）

笠間友博（箱根町役場）

加藤 潔（駒澤大学）

香取拓馬（フォッサマグナミュージアム）

金丸龍夫（日本大学）

神谷奈々（京都大学）

川村紀子（海上保安庁海上保安大学校）

清川昌一（九州大学）

桑野太輔（京都大学）

小松原純子（産業技術総合研究所）

齋藤 眞（産業技術総合研究所）

佐々木和彦（佐々木技術士事務所）

澤 燦道（東北大学）

沢田 健（北海道大学）

沢田 輝（富山大学）

下岡和也（関西学院大学）

菅沼悠介（国立極地研究所）

高野 修（石油資源開発（株））

田村嘉之（千葉県環境財団）

中澤 努（産業技術総合研究所）

西 弘嗣（福井県立大学）

野田 篤（産業技術総合研究所）

広瀬 亘（北海道立総合研究機構）

松田博貴（熊本大学）

道林克禎（名古屋大学）

矢島道子（東京都立大学）

山本啓司（鹿児島大学）

和田穰隆（奈良教育大学）

監 事

任期：2024年6月8日から2028年総会

岩部良子（応用地質（株））

山本正司（山本司法書士事務所）



一般社団法人日本地質学会

〒101-0032 東京都千代田区岩本町 2-8-15 井桁ビル

電話 03-5823-1150 FAX 03-5823-1156（振替口座 00140-8-28067）

e-mail: main@geosociety.jp ホームページ <http://geosociety.jp>

日本地質学会 *News*

Vol.28 No.10 October 2025

The Geological Society of Japan News

一般社団法人日本地質学会

〒101-0032 東京都千代田区岩本町2-8-15 井桁ビル 6F

編集委員長 松田達生

TEL 03-5823-1150 FAX 03-5823-1156

main@geosociety.jp (庶務一般)

journal@geosociety.jp (編集)

http://www.geosociety.jp

Contents

案内……2

海と地球のシンポジウム2025

公募……2

京都大学大学院理学研究科地球惑星科学専攻地質学鉱物学分野教授

公募

各賞・助成……2

第67回藤原賞受賞候補者推薦依頼/山田科学振興財団2026年度研究援

助候補者推薦依頼

CALENDAR……3

紹介……4

石が語る出雲国の物語 30億年の地学探訪 澤田順弘 著 (酒井哲弥)

博物館・ジオパークで地球を学ぼう! (45) ……5

沖縄県立博物館・美術館:「海と島に生きる」沖縄県最大の総合博物

館 (新山颯大・宇佐美 賢)

学協会・研究会報告……7

International Meeting for Applied Geoscience and Energy 2025参加

報告 (山本和幸)

再販記念キャンペーン:

学会オリジナルフィールドノート……8

サマスキ報告……9

第24回地震火山地質子どもサマースクール御嶽山実施報告 (道家涼

介)

院生コーナー……11

日本地質学会中部支部2025年度支部年会 参加報告 (外山和也)

訃報……12

学会記事……13

2025年度第1回執行理事会議事録

2025年度第2回執行理事会議事録

表紙紹介……16

白山-白川郷ホワイトロードの瓢箪大滝をつくる流紋岩質レオイグ

ニンプライトの枕状溶岩 (海野 進)

印刷・製本: 日本印刷株式会社 東京都豊島区東池袋4-41-24

日本地質学会 キャリアビジョン誌2025掲載企業募集……16

【在会会員に限る】2026年度からの学生会費の申請に
ついて……17

2026年度の会費払い込みについて……18

巻末 会費口座振替依頼書

2026 年度 代議員選挙 立候補届受付中

選挙システムによる立候補締切

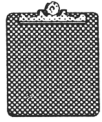
11月19日(水) 17時

詳しくは、ニュース誌9月号もしくは学会HPを参照
してください。

2026 年度学会各賞候補者募集

応募締切: 12月1日(月)

詳しくは、ニュース誌9月号もしくは学会HPを参照
してください。



ご案内

本会以外の学会および研究会・委員会からのご案内を掲載します。

海と地球のシンポジウム2025

この度、東京大学大気海洋研究所（AORI）と海洋研究開発機構（JAMSTEC）は、JAMSTECが運用する研究船等を利用して得られた研究や技術開発の成果報告会として、下記のとおり、「海と地球のシンポジウム2025」を開催いたします。研究船等を利用して研究をされている方は、ぜひご発表いただきたくお願い申し上げます。また多くの皆様のご参加もお待ちしております。

日程：2026年3月10日（火）～11日（水）
会場：東京大学弥生キャンパス 弥生講堂
発表を希望される方へ：「発表課題登録」を行っていただきたく、以下のWebページからアクセスしていただき、発表課題のご登録をお願いします。主席研究者・首席研究者および乗船課題に関係する研究者の皆さまの積極的なご応募をお待ちしております。

発表募集期間：2025年9月3日（水）～12月12日（金）

応募方法：下記の「発表課題募集」ページにある応募フォームからご応募ください。

<https://www.jamstec.go.jp/j/pr-event/ocean-and-earth2025/invitation.html>

※Confitアカウントにてログイン後、参加区分等を指定し、登録を完了させてください。完了後、自動送信にて参加に関する確認メールが届きます。

参加登録登録期間：2025年9月3日（水）～2026年2月20日（金）

登録方法：下記の「参加登録」ページにある応募フォームからそれぞれご登録ください。

<https://www.jamstec.go.jp/j/pr-event/ocean-and-earth2025/entry.html>

※完了後、自動送信にて懇親会参加に関する確認メールが届きます。

詳細は、ホームページをご覧ください。

<https://www.jamstec.go.jp/j/pr-event/ocean-and-earth2025/>

公募

教員・職員公募等の求人ニュース原稿につきましては、採用結果をお知らせいただけまようお願いします。



京都大学大学院理学研究科 地球惑星科学専攻地質学鉱物学 分野教授公募

職種：教授

募集人員：1名

所属：地球惑星科学系

勤務場所：京都大学大学院理学研究科地球惑星科学専攻地質学鉱物学分野地球生物圏史講座（京都市左京区北白川追分町）

勤務内容：構造地質学に関連する教育・研究、大学運営の業務

募集分野等：構造地質学に関連する先端的かつ分野横断的研究を、地球惑星科学専攻や学内外の他の分野の研究者と協力しながら、推進される方。特に野外地質調査とフィールドデータの解析に基づく研究手法を用い、地球惑星科学に関する広い見識を有する方。ならびに、教育（地球科学に関する全学共通科目・学部専門科目・大学院科目の授業・野外実習など）と大学運営の業務に尽力される方。

資格等：博士の学位を有すること

着任時期：2026年4月1日以降、可能な限り早い時期

任期：なし

試用期間：あり（6か月）

応募締切：2025年12月1日（月）17:00

選考方法：書類審査を経て面接を行うことがあります。

問い合わせ先：〒606-8502 京都市左京区北白川追分町

京都大学大学院理学研究科地球惑星科学専攻専攻長 河上 哲生 電話：075-753-4172

E-mail：kawakami.tetsuo.3e@kyoto-u.ac.jp
応募方法および必要書類など公募の詳細は、

大学WEBサイトよりご確認ください。

<https://www.kyoto-u.ac.jp/ja/jobs/open>

各賞・研究助成



日本地質学会に寄せられた候補者の募集・推薦依頼等をご案内致します。

第67回 藤原賞受賞候補者推薦依頼

推薦の対象：自然科学分野に属するものとし

ます。
受賞候補者：日本の国籍があり、かつ日本在住の方であれば、ほかに賞を受けられた方でも、また以前に推薦された方でも結構です。

*受賞候補者には必ず所属組織・研究機関の長又は相当する学識者の推薦が必要です。（受賞候補者は原則として受賞対象題目1件につき1人とし

ます。）
推薦要項書：必要事項を記入してお送り下さい。なお参考資料として、受賞候補者の受賞対象題目と関係する主要論文テーマ（10篇以内）のリストおよび主要論文（3篇以内）をPDF化して送信して下さい。送信頂くPDFファイルは、①推薦要項書と主要論文テーマリスト、②主要論文1、③主要論文2、④主要論文3、に分けて下さい。

賞の内容：年2件 賞状、賞牌（金メダル）、副賞（各2千万円）

選考：5つの分科（①数学・物理、②化学、③工学、④生物・農学、⑤医学）に分けて行いますので、推薦要項書1ページ上段の希望分科欄に推薦者が考えた希望の分科を○印で囲んでください。ただし、決定は選考委員会が行います。

受賞者の決定：2026年5月中旬とし、贈呈式は2026年6月17日（藤原銀次郎の誕生日）に行います。

提出締切日：2025年12月15日（月）（学会締切：12月1日（月））

推薦要項書送り先：〒104-0061 東京都中央区銀座3丁目7番12号

公益財団法人 藤原科学財団 TEL (03) 3561-7736

FAX (03) 3561-7860

募集要項書等、詳しくは、<http://www.fujizai.or.jp>

山田科学振興財団2026年度 研究援助候補者推薦依頼

1. 研究援助の趣旨

1) 萌芽的・独創的研究

2) 新規研究グループで実施される研究

3) 学際性、国際性の観点からみて優れた研究

※評価が定着して研究資金が得やすいものよ

り、萌芽的で将来の発展が期待され基礎研究を重視します。

※多様な視点や発想を取り入れた研究活動を実践する創造力ある研究者を積極的に支援するため、本財団は、女性の活躍はもちろんのこと、一人一人の多様性を尊重します。

2. 援助額は1件当たり150～300万円、援助規模は総額4,000万円、採択件数18件程度を予定しています。また、女性研究者3名以上の採択を見込んでいます。

3. 援助金を給与にあててはできません。特に財団が指定した場合を除き、給与以外の

使途は自由です。

4. 援助金の使用期間は、採択日から翌年度の3月末日までとします。

【注意事項】本財団は自然科学の基礎研究に特化して支援を行っております。したがって、自然科学以外の分野や、基礎研究に該当しない研究（例：医学における新規治療法の開発など、実用・応用を目的とする研究）は審査の対象外といたします。

応募締切：2026年2月28日

※学会推薦です（地質学会の推薦枠：3件）。推薦を希望される方は、2026年2月6日（金）までに応募書類を整えて、地質学会事務局

（main@geosociety.jp）までご連絡ください。

※このほか、「女性活躍支援枠」、「チャレンジ支援枠」があります（学会推薦不要）。

問い合わせ先：公益財団法人 山田科学振興財団

〒544-8666 大阪市生野区巽西1-8-1

Phone: 06-6758-3745 Fax: 06-6758-4811

E-mail: office@yamadazaidan.jp

URL: <https://yamadazaidan.jp/>

詳しくは、

https://yamadazaidan.jp/requirements/grant-bosyu_kenkyu/

CALENDAR

2025.11～

地球科学分野に関する研究会、学会、国際会議、などの開催日、会合名、開催学会、開催場所をご案内致します。会員の皆様の情報をお待ちしています。

★印は学会主催、（共）共催、（後）後援、（協）協賛。

2025年

11月 November

国際 Gondwana 研究連合 (IAGR) 2025年総会及び第22回 Gondwana からアジア国際シンポジウム

11月2日（日）～6日（木）

会場：延世大学新村キャンパス（韓国ソウル）

2日：参加登録とアイスブレイカー

3日・4日：シンポジウム、総会、晩餐会

5日・6日：野外討論会

[http://www.gondwanainst.org/symposium/2025/IAGR/IAGR 2025 Circulars.docx](http://www.gondwanainst.org/symposium/2025/IAGR/IAGR%2025%20Circulars.docx)

火山災害軽減のための方策に関する国際ワークショップ2025

アイスランドから学ぶ火山防災

11月4日（火）13:00～17:00

会場：ビジョンセンター新橋（東京都千代田区内幸町）

参加無料・要申込（10/31 17時まで）

<https://www.mfri.pref.yamanashi.jp/event/iws2025.pdf>

（協）石油技術協会令和7年度秋季講演会

テーマ「変化する世界情勢と日本のエネルギー戦略～脱炭素から低炭素への潮流転換～」

11月6日（木）9:30～16:40

場所：東京大学小柴ホール（東京都文京区本郷）

参加費：石油技術協会会員、賛助会員、協賛団体（含所属者）：3,000 円

※地質学会会員は、協会会員と同額で参加可能です。

<https://www.japt.org/>

東京地学協会秋季講演会

「令和6年能登半島地震による地形変化と災害の実態」

11月8日（土）13:00～16:30

会場：リファレンス麹町（東京都千代田区麹町3丁目）

事前申込不要、参加費無料

<https://www.geog.or.jp/>

第17回日韓中地理学会議

11月11日（火）～14日（金）

会場：京都テルサ（京都市南区東九条下殿田町70）

<https://www.dh-jac.net/wp/17jkc/>

（後）～発注者・若手技術者が知っておきたい～『地質調査実施要領』解説講習会

【大阪会場】新梅田研修センター（大阪市福島区福島）

11月12日（水）10:00～17:00

【東京会場】AP市ヶ谷（東京都千代田区五番町）

11月18日（火）10:00-17:00

主催：経済調査会・全国地質調査業協会連合会

受講料：12,100円（税込）/1名＋テキスト代

定員120名程度（定員になり次第締切り）

<https://seminar.zai-keicho.or.jp/>

★2025年度北海道支部例会（個人講演会）

11月15日（土）13:00～18:00

場所：オンライン開催

講演申込：10月21日（火）

<https://geosociety.jp/outline/content0023.html>

原子力発電環境整備機構（NUMO）国際セミナー

地層処分技術の信頼性に関するメッセージをいかに発信すべきか―諸外国における経験

11月21日（金）14:00～17:00

Zoom Video Webinarによるオンライン開催

参加無料、申込締切：11月12日（水）13:00

<https://www.numo.or.jp/topics/202525101013.html>

（協）Techno-Ocean 2025

11月27日（木）～29日（土）

会場：神戸国際展示場2号館ほか（神戸市中央区港島中町6-11-1）

<https://to2025.techno-ocean.com/>

（協）第41回ゼオライト研究発表会

11月27日（木）～28日（金）

会場：富山国際会議場

<https://jza-online.org/event>

12月 December

（後）三浦半島活断層調査会創立30周年記念 一般公開講座

宅地開発で隠れた衣笠断層帯を歩く

12月6日（土）（小雨決行）

参加申込締切：11月30日

<https://geosociety.jp/outline/content0255.html#12>

地質学史懇話会総会

12月20日（土）13:30-17:00

場所：北とびあ 803号室（東京都北区王子）

・石渡 明：江原真伍の太平洋運動（1942）の光と影

・黒田和男：坪井忠二ほか《1954》「日本全国重力測定」を読む

問い合わせ先：矢島道子 pxi02070@nifty.com

2026年

3月 March

変形・透水試験機設計セミナー 2026

3月9日（月）～11日（水）

場所：京都大学 吉田キャンパス

<https://sites.google.com/view/designseminar2025/>

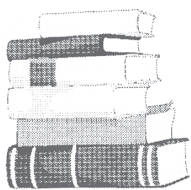
海と地球のシンポジウム2025

3月10日（火）～11日（水）

会場：東京大学弥生キャンパス 弥生講堂

発表募集締切：2025年12月12日（金）

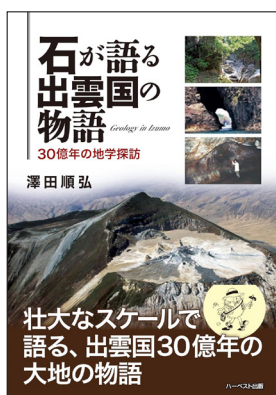
<https://www.jamstec.go.jp/j/pr-event/ocean-and-earth2025/>



紹介

石が語る出雲国の物語 30億年の地学探訪

澤田順弘 著



ハーベスト出版、2025年7月10日 発行、
ISBN 978-4-8645-6567-7、367ページ、
価格2,970円（本体2,700円＋税）

「石が語る出雲国の物語—30億年の地学探訪」は、1970年に「マグマ信仰」に取り憑かれた澤田順弘氏が55年間に渡って島根の地に根を張り、ひたむきに地質学、火山学、年代学に取り組んだ成果を結実させた一冊である。

この書を手に取った瞬間、驚かされるのは表紙だ。カーボナタイトを噴出するタンザニアのオルドニョ・レンガイが表紙を飾る。意図は表紙裏に解説があるので、ぜひ実際に本を手にとって確かめて欲しい。

本書の構成を見てみよう。はじめに、第1話 神々の古里、出雲国への誘い、第2話 ユーラシア大陸東縁の時代、第3話 ユーラシア大陸東縁で起こった大事変とその後、第4話 比婆山：脅威の自然、そして神と人々が語り継ぐ物語、第5話 宍道地溝帯の古傷がうずく：第四紀火山と断層、第6話 中国地方のもっとも新しい火山、第7話 第四紀の出雲国における自然と人々の織りなす物語、第8話 自然からの贈り物、物語：地学解説、そして文献リストを挟んで、余話：わが人生の旅路、あとがき、と続く。

「さあ！石の扉を開けよう」で始まる本書。

多くの読者が「澤田岩石学ワールド」の展開を期待するだろうが、その期待はすぐに裏切られる。第1話では、この地の地理や歴史が簡潔に紹介され、神話や人々の営みと石が結びつけられて語られる。八俣大蛇、もののけ姫、たたら製鉄、出雲を象徴するキーワードが次々と登場する。出雲の地形や災害も、たたら製鉄とは切り離せず、その製鉄による正と負の遺産が語られる。ここで明確になるのは、本書が単に地学を語る書ではなく、出雲という地を題材に、歴史と自然に耳を傾け、それを紐解く書であるという点である。

第2話、第3話は西南日本がユーラシア大陸の東縁にあった時代から、日本海形成期に至る地史が語られる。若き澤田順弘が研究に挑んだ奮闘の歴史も刻まれる。日本海形成はこの地の骨格を作る大イベントである。この章にはもう少し「澤田流の日本海形成論」が込められていると良かったと感じた。

第4話では、安来市の南部・伯太町にある比婆山周辺の大地をつくる、峠之内(たわのうち)玄武岩(約130万年前に噴出した溶岩)の話がまさに溶岩のごとく、熱く語られる。本書の中核である。比婆山は古事記に伊邪那美(いざなみ)の墓所としての記述がある山である。第4話の章立ては、「第4話の1 脅威の自然」、「第4話の2 「神」と人々の物語」の二部構成となっている。第4話の1は、2023年にBulletin of Volcanologyで公表された、峠之内玄武岩の研究結果が展開される。世にも珍しい花崗岩基盤中にできた活動的な溶岩湖が固結した姿で残されており、この物語が精緻な地質調査を基にして、古地磁気学、シミュレーションも加味して生々しく語られている。他の章の約1.5倍のページを割いた第4話は、澤田氏の情熱の章である。読者は、地質調査データからモデル構築に至るまでの過程を追体験できる。どんな先端的研究であっても、しっかりと地質・岩石記載が無ければ意味がない... 澤田氏の強い信念が感じられる。

第4話の2では、比婆山を伊邪那美の神の墓所であるとの説を、石と景観を手掛かりに独自の視点で論じている。学問と神話が交錯する、まさに出雲らしい世界観が展開される。この議論に対するレビューも秀逸である。

第5話では宍道地溝帯(低地帯)における第四紀の火山や断層の話が扱われる。中でも大根島が印象的である。この島は約19万年前に玄武岩溶岩が噴出してできた火山である。粘性が小さな玄武岩溶岩の多種多様な産状や地形が観察される。特に溶岩トンネルの写真は圧巻である。この島の地質・地形のみならず、貴重な洞窟生物や淡水レンズの存在にも触れられ、噴出した溶岩が造り出す自然の多様性を伝えている。第6話は第四紀の大山や活火山の三瓶山の話である。

第7話では、最新の知見を交えつつ、出雲国の地形発達史・歴史が俯瞰的に論じられている。ここでもたたら製鉄が重要なキーワー

ドである。第8話では、資源としての石に焦点が当てられる。松江城や主要神社の石材の観察・分析に基づくそれらの産地同定や、多様な石材を適材適所に利用することに対する考察など、澤田流の洞察が光る。石の背後にある、文化的な背景が鮮やかに浮かび上がる章である。

「余話：わが人生の旅路」では、澤田氏の歩みが語られる。澤田少年の出会った「本」が後の人生に影響し、高校、京都大学での出会いを経て、研究者としての礎が築かれた。波乱万丈の人生を振り返るこの章は、読者に深い余韻と、一抹の寂しさを残すだろう。

本書を一言で評すなら「出雲国を地球科学と歴史の両面から総合的に診断した書」である。出雲の地に腰を据えて長年、地球科学の研究をすると、神話や歴史との接点を避けては通れない。この地の歴史を深く知る地質学の第一人者としての自負と責任を胸に、この書を書き上げたに違いない。学問の細分化が進む今、澤田氏のような、俯瞰的に全体を見渡せる研究者、すなわち「地球科学の総合診療医」がどれだけ貴重であるかを改めて感じる。澤田氏もまたそのような危機感を抱きながら本書を著したのではなかろうか？そんな思いを抱きつつ、本を閉じることとした。

本書はとにかく読みやすい。語り口がやさしい。専門用語にも丁寧な説明が添えられている。文字を追いかけると内容が頭の中に染み込むような感覚を覚える。「物語：地学解説」は専門外の読者への格好の道標である。ふんだんに盛り込まれた図版や写真のほぼすべてがカラーであることも驚きである。岩石試料の写真も美しい。本を眺めているだけでも楽しい。カラフルな構成の中に散りばめられた白黒の切り絵や手書きのイラストは一服の清涼剤のようである。

そのイラストは、パートナーであったちづ子さんの手による。2022年に彼女は惜しくも天に召された。我々の計り知ることができない深い悲しみの中で、350ページを超える大作の執筆へと澤田氏をつき動かしたのはマグマのごとき情熱であったに違いない。一方で、本の中の澤田氏は出雲国のことを我々にやさしく語りかける。研究への強い思い、出雲への思い、澤田研究に関わった人々への思い、ちづ子さんへの思い、読者への思いが伝わる。この本はそんな一冊でもある。

評者の酒井は、2002年よりケニアでの地質調査で澤田氏と一緒した。「澤田順弘(さわだ じゅんこう)、最後の決戦！」これは毎年の調査で、お決まりのセリフだった。今年、著者の澤田氏も81歳、この本も「最後の決戦」では決してないはず。次なる著書を楽しみにしているところである。

(酒井哲弥)



博物館・ジオパークで地球を学ぼう！(45)
沖縄県立博物館・美術館

写真1. 沖縄県立博物館・美術館の外観。
沖縄のグスクをモチーフとしてデザインされている。

info

沖縄県立博物館・美術館

〒900-0006

沖縄県那覇市おもろまち3丁目1-1

<https://okimu.jp/>

での約2億年間の歴史を紹介しています。

○総合展示「化石が語る沖縄」

総合展示は自然史・人文合わせて古い時代のものから順に展示が構成されています。そして、人々の営みを紹介する第一章「海で結ばれた人々」では、序章として「化石が語る沖縄」のコーナーが設けられています。このコーナーでは、球形の展示スペース（通称サークルホール）に沖縄県の代表的な化石が集められています。向かって左側の三疊紀のアンモナイトから、右側の第四紀完新世のオオジャコに至るまで、約2億年間の地質史を象徴する化石標本が来館者を出迎えます。以下、「化石が語る沖縄」のコーナーで見ることができる化石の一部を紹介します。

主に後期三疊紀カーニアン期からノーリアン期の時代を示すアンモナイト群は、沖縄島北部の本部半島と辺戸岬に分布する今帰仁層（前期白亜紀付加体本部ユニット中の大規模石灰岩体）から産出します。当館では、本部半島で採集された複数個体のアンモナイトが確認できる幅約80 cmの標本を展示しています。*Hannaoceras henseli*や*Arietoceltites arietitides*など、国内ではなかなか見られない種が多く含まれることが特徴であり、沖縄県における中生代の代表的な化石となっています。サークルホール側方には、大型の石灰岩（大型有孔虫*Cycloclypeus*を含む）を展示しています。沖縄県の特徴的な地質と言える“琉球石灰岩”（琉球層群の石灰岩）は、主に更新世カラブリアン期からチバニアン期に堆積したサンゴ礁複合体堆積物で、沖縄県内の陸地の約3割を占めると言われています。サークルホール中央には、主に後期更新世の陸生脊椎動物化石の全身復元骨格（レプリカ）が並んでいます。サークルホールに展示されている3種のシカ類（リュウキュウジカ、リ

「海と島に生きる」沖縄県最大の総合博物館

博物館班 地質担当学芸員 新山颯大

地学担当学芸員 宇佐美 賢

【沖縄県立博物館・美術館（博物館）の沿革・展示の概要】

「Okimu（おきみゅー）」の愛称で親しまれている沖縄県立博物館・美術館は、那覇市おもろまちの新都心公園に隣接する沖縄県立の博物館です。

○沖縄県立博物館・美術館が設立されるまで

沖縄戦の影響を受けたことにより、当館の前身にあたる施設は複雑な変遷を辿ってきました。戦前の1936年に「沖縄県教育会附設沖縄郷土博物館」が創設され、人文系資料の調査・収集が始まりましたが、1945年の沖縄戦によって沖縄郷土博物館は全焼しました。戦後すぐに、沖縄戦で被害を受けた文化財（残欠文化財）の収集活動が行われました。その結果、二つの施設が設立されました。一つは「首里市立郷土博物館」（1946年開館、1947年に「沖縄民政府立首里博物館」へ改称）。もう一つは「米国海軍軍政府沖縄陳列館」（1945年開館、1946年より沖縄民政府に移管され、「沖縄民政府立東恩納博物館」に改称）です。1953年には東恩納博物館が首里博物館に併合され、1955年に「沖縄民政府立首里博物館」に改称されました。この首里博物館は1972年に沖縄が日本に復帰したことにより「沖縄県立博物館」に改称され、2007年11月1日から開館した現在の「沖縄県立博物館・美術館」

の直接の前身となりました。

○展示の概要

当館は人文系の分野（歴史、民俗、考古、美術工芸）と自然史系の分野（生物、地学、人類）の資料を取り扱う総合博物館で、常設展示は『海と島に生きる』をテーマに、沖縄県ならではの自然や島で育まれた歴史・文化を紹介しています。

常設展示は総合展示（全7章）と部門展示（自然史（生物、地学、人類）、考古、美術工芸、歴史、民俗の5つ）に分かれており、地質学に関わる資料は主に総合展示の冒頭と自然史の部門展示に展示されています。当館は美術館と一体化した組織となっていますが、博物館側には13名の学芸員が在籍しており、地質（地学）担当は自然史部門の中に含まれています。

【沖縄県立博物館・美術館の地質学関連の展示】

南北400 km、東西1,000 kmに広がる大小40の有人島と多数の無人島からなる沖縄県は、元々大陸と地続きであった大陸島であり、湿潤な亜熱帯気候のもとで独自の進化を遂げた生物相が形成されました。沖縄県立博物館・美術館の自然史に関連する展示の内容は、ジュラ紀の付加体から現在に至るま



左から、写真2. サークルホールの展示。後期更新世の脊椎動物化石は様々な種類が発見されている。サークルホールでは、シカだけでなくイノシシやヤンバルクイナの復元骨格も展示されている。写真3. 沖縄県の地質図と代表的な岩石資料の展示。“琉球石灰岩”が分布する陸地は約3割程度と言われており、ジュラ紀～古第三紀付加体に加えて、中新世～鮮新世の非石灰質海成層などが島の大地を形作る。写真4. 様々な種類の“琉球石灰岩”。琉球層群の石灰岩は様々な種類の生物の遺骸で構成されている。石灰岩を構成する生物遺骸の種類や組成によって岩相が区分され、現生サンゴ礁とその周辺海域の生物相・堆積相との比較から堆積環境が推定される。



写真5. 港川人1号～4号のレプリカ。各個体の産出した部位が展示されている。国内の後期更新世の化石人骨としては極めて保存状態が良好で、1号は顔面も復元されている。

ユウキュウムカシキョン、ミヤコノロジカ) はすべて絶滅種で、約3万年前ごろには姿を消したと考えられています。現在は生きた姿を見ることはできませんが、シカ類の化石は沖縄県内各地から豊富に見つかっています。こうした後期更新世の陸生動物の化石は、“琉球石灰岩”に形成されたフィッシャー(裂罅)や洞穴(洞窟)の堆積物中に保存されていました。炭酸カルシウムを主成分とする石灰岩はアルカリ性です。さらに、沖縄県内では更新世以降の(酸性の)火山灰の堆積も少なかったため、骨化石の保存に適した環境が維持されました。このような背景から、豊富な陸生動物の化石が今日まで残されてきたと考えられています。港川フィッシャー(約2万2,000～2万年前の層準)から産出した新人(*Homo sapiens*)である港川人については、部門展示の項で改めて紹介します。

○地質学に関わる人文系資料

人文系資料として取り扱われているものの中には、地質学に関係する石製資料が多々あります。考古部門展示室では石器、石斧など、歴史部門展示室では硫黄(硫黄島産)、民俗部門展示室では石獅子、石敢當、石厨子などがあります。これら人文系資料の素材には、琉球・沖縄産だけでなく、九州や中国など、様々な地域で産出した岩石が使用されています。沖縄産の岩石の代表例としては、島尻層群豊見城層の小緑砂岩部層から産出する“ニービスフニ”(小緑砂岩部層から産出する砂岩ノジュールの方言名)があり、琉球王国時代の石碑など、この“ニービスフニ”製の人文系資料は重要文化財に指定されているものもあります。またそれらの中には沖縄戦によって一部が破壊され欠損しているものも多くあります。人文系の石製資料を通して、琉球・沖縄特有の交易や歴史と文化を垣間見ることが出来ます。

○自然史部門展示室の地質関連資料

自然史部門展示「生物が語る沖縄2億年」では、地質・生物・人類の3分野の資料を展示しています。地質に関する展示の最初には、沖縄県全域の地質図と各地の代表的な岩石が並べられています。この展示を最初に見ることで、沖縄県各地の地質の分布状況を把握できるようになっています。さらに、およそ新生代以降の琉球列島周辺の古地理図や、沖縄トラフ周辺の地形断面図のパネルなどを用いて、沖縄県が現在のような島々の形になるまでの変遷をたどれるよう工夫されています。

“琉球石灰岩”が広域に分布することが沖縄県の地質の大きな特徴ですが、その「島々の土台」とも呼ぶべき地質は、主に西南日本に分布するジュラ紀～古第三紀の付加体です。これらの付加体のうち、伊平屋島などに分布するジュラ紀～白亜紀の付加体堆積物には石灰岩体も含まれており、海生無脊椎動物化石が産出します。産出するのは主に中期ペルム紀のフズリナ(*Neoschwagerina craticulifera*や*Yabeina globosa*ほか)などです。部門展示室では、沖縄県における古生代の化石の代表例として、四方サンゴである*Waagenophyllum okinawense*やフズリナの切片標本を展示しています。

沖縄県の地質体は、そのほとんどが堆積岩、特に海成層で構成されています。しかし、久米島のように新生代以降の火山活動の痕跡が残された島々、また、県内唯一の活火山島である硫黄島など、少ないながらも火成岩が分布する島もあります。これらの火成岩類は、島々の成り立ちを語る上では欠かせない存在です。火成岩の代表的な資料として、久米島の中期中新統阿良岳層の安山岩を展示しています。この安山岩は、熱水の影響により緑色に変質しており、柱状節理を示します。

自然史の部門展示の中でも、地質の後に続く人類分野の展示では、4体の港川人の化石人骨レプリカ(1号:男性、2～4号:女性)

を展示しています。港川人は、約2万年前の後期更新世(旧石器時代)のフィッシャー堆積物から産出した化石人骨です。これらの発見は、後期更新世から人類が沖縄の島々に到達していたことを示す証拠となりました。その後も、港川人より古い約2万3000年前の世界最古の釣り針がサキタリ洞で発見されました。沖縄は世界的にも旧石器時代人類学的な研究において重視される地域となっています。

○自然観察コーナーの岩石標本

自然史部門展示室の最後にあたる自然観察コーナーでは、沖縄産の主な石灰岩6種類のハンズオン展示を設けています。内訳は本部ユニットのペルム紀石灰岩および(今帰仁層の)三疊紀石灰岩、宮良層の古第三紀石灰岩、大東層の新第三紀～第四紀石灰岩、琉球層群那覇層の石灰岩、そして港川層の石灰岩)です。また、近年起こった地質学的なイベントに関連して、2021年に沖縄県各地に漂着した福徳岡ノ場の軽石や、2023年から噴出を始めた硫黄島の軽石の中から、特に大型の標本を展示しています。

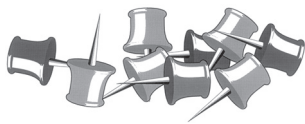
【調査研究と収蔵資料】

沖縄県立博物館・美術館の収蔵資料のうち、地質(地学)資料は全2,000件以上あり、点数は5万点を超えます。点数の大部分を占めるのは、沖縄県内各地の洞穴・フィッシャー堆積物から産出した後期更新世の陸生脊椎動物化石です。特に絶滅したシカ類(リュウキュウジカ、リュウキュウムカシキョン、ミヤコノロジカ)の数が多くなっています。この他、県内各地の島々で採集された琉球層群の石灰岩をはじめ、沖縄県内で産出する代表的な地質資料が揃っています。

【教育普及行事】

沖縄県は広大な島嶼地域であるため、当館では県内の離島域における教育普及活動にも力を入れています。「博物館のもつ資源(もの、情報、人)を学校教育の場で有効に活用する」ことを目的として、各分野の学芸員が出張して出前授業などを実施しています。依頼があれば離島域へも出張し、各地の子供たちへの教育普及活動を積極的に行っています。さらに、年に一度の移動展を実施しており、離島を主な対象に当館が収蔵する各分野の資料を出展展示しています。

定期的な教育普及活動として、当館では毎月各1回の学芸員講座と文化講座を開催しており、地質担当の講座は年に1回もしくは2回実施しています。学芸員講座のうち、地質担当の回ではフィールドツアー(ジオツアー)を開催することがあります。ツアーの場所は沖縄島に限定せず、近年は多良間島、伊平屋島など様々な島を舞台に地質に関する教育・普及活動を行っています。



学協会・研究会報告

International Meeting for Applied Geoscience and Energy 2025 参加報告

山本和幸（株式会社 INPEX）

2025年8月25日～28日に米国テキサス州ヒューストンで開催されたInternational Meeting for Applied Geoscience and Energy 2025 (IMAGE2025)に参加した、その概要について報告する。

IMAGEの概要

IMAGEは、石油地質学の学会である American Association of Petroleum Geologists (AAPG)、物理探査学の学会である Society of Exploration Geophysicists (SEG)、および堆積地質学の学会である Society for Sedimentary Geology (SEPM)の3学会が、2021年から合同で開催している、エネルギー資源開発分野における世界最大級の国際学会であり、毎年、ヒューストン中心部にあるジョージ・R・ブラウン・コンベンションセンターで開催されている（写真1）。開催地であるヒューストンは宇宙産業で栄えた都市として日本ではなじみがあるが、古くから石油・天然ガスを中心としたエネルギー関連企業の本社や拠点が集積する都市としても世界的に知られている。

今年のIMAGE2025は、開催から5年目の節目となり、過去5年間の成果を振り返りつつ、エネルギー資源開発における次世代の技術革

新や新たな挑戦を見据えたプログラムで構成された。参加者は学術研究者、学生、企業関係者など幅広く、延べ93か国から7,800人を超える大規模なものとなった。技術セッション・プログラムでは、分野横断の協働とイノベーションを促進することを目的に、主に以下の6つのトピックが取り上げられた。

- ①米国／カナダ、ラテンアメリカ／カリブ海、アフリカ、ヨーロッパ／カスピ海地域、アジア太平洋、東地中海／中東にわたる地域的視点からの石油・天然ガスの探鉱・開発に関わる統合的研究と技術開発
- ②堆積盆地モデリング、堆積地質学、地球化学、構造地質学、古生物学に関する基礎研究と応用技術
- ③地震探査データの取得・処理・インバージョン、AVO解析、電磁探査、重力・磁気、坑井地球物理、岩石物理などの物理探査技術
- ④地質学と物理探査学の分野横断的なデータとアプローチの統合による地下情報理解の高度化
- ⑤デジタル化、機械学習、人工知能、ならびにそれらのエネルギー開発分野への応用に資する先端技術
- ⑥二酸化炭素回収・貯留、再生可能エネルギー

一、環境地球科学など、低炭素社会の実現に必要な関連技術

これらのトピックは、163の口頭発表セッションと129のポスター発表セッションからなる、1,100件を超える発表で構成されている。

堆積地質学に関連した講演

前述のトピックのうち、筆者が聴講した堆積地質学関連の講演の一部を簡潔に報告する。まず炭酸塩堆積物に関しては、SEPM主催による最新研究動向を扱う2日間の研究集会が開催され、炭酸塩堆積物の物理・生物・化学過程に基づく堆積プロセス、碎屑性堆積物と湖成炭酸塩堆積物の混合システム、炭酸塩堆積物に記録された地球環境変動の解析、炭酸塩堆積物研究への新技術の適用に関する講演が行われた。巨大油田群を構成する中東ジュラ系の炭酸塩プラットフォーム堆積物を対象に、陸棚内堆積盆地の古水深地形をアイソスタティック補正で復元し、スーパーコンピュータによる海洋数値シミュレーションで石油根岩の分布予測を試みる研究や、IODPで掘削されたモルディブ周辺の中新統炭酸塩ドリフト堆積物におけるドロマイト化を底層流のカレントポンピング現象で説明し、その考察を北米ガス田の貯留岩性状解析に適用する事例などが報告された。さらに、この研究集会以外でも、IMAGE2025では深海性炭酸塩堆積物や炭酸塩続成作用などのセッションにおいて多数の研究結果が発表され、その中で筆者は、アラブ首長国連邦アブダビ沖の巨大油田における干潟炭酸塩堆積物の貯留岩性状解析に関するポスター発表を行った。

碎屑性堆積物の研究動向としては、全体に深海性堆積物を扱う発表が多く、なかでもタービダイト・コンターライト混合システムに関するSEPMの特別セッションが象徴的であった。近年、世界各地で坑井データと地震探査データの蓄積・統合解釈が進み、重力流と底層流の相互作用による複雑な堆積プロセスが明らかになりつつある。これらのプロセスは、油ガス田のトラップ形成やシールの有効性、貯留岩の分布・性状に大きく影響することが、多くの研究事例で示されていた。深海性堆積物の研究は世界各地で行われているが、その中でも新規油ガス田の発見が相次ぐ南米および西アフリカの受動的大陸縁辺は、企業・大学の注目度が高く、活発な研究が展開されている地域の一つである。広域地震探査、重力・磁気探査、坑井・コア、年代・層序など多様なデータを統合して広域テクトニクスと堆積システムを一体的に理解し、さらに有機地球化学と堆積盆地熱史モデリングにより炭化水素の生成・排出・移動を定量化して石油システムを統合的に解明する研究が盛んに行われている。

また、毎年IMAGEでは「新規油ガス田の大発見」をテーマに、発見に至る長い道のりで培われた技術者の哲学・教訓・技術革新を



写真1. IMAGE2025が開催されたジョージ・R・ブラウン・コンベンションセンター

紹介する特別フォーラムが開催されており、今年度は地震探査による炭化水素の直接検知指標（DHI：Direct Hydrocarbon Indicator）に関連する内容であった。とりわけ、南米コロンビア沖の深海フロンティアを対象とした探鉱事例では、当該指標の評価を活用して新規油・ガス田を発見するためには、数十年にわたる地質・物理探査データの蓄積、それに基づく深い地質学的考察、技術的失敗からの学びを糧とする長期的視点の粘り強い探鉱努力が不可欠であることが強調されていた。

堆積地質学分野での先端技術適用の動向としては、機械学習の導入が急速に進んでいる印象を受けた。例えば、コア試料の画像解析や、地表カルストの特徴量化と生成AIによるデータ拡張を通じて、地下深部におけるカルストの分布を予測し、掘削障害リスクの不

確実性を低減する取り組みなど、先端技術を活用した研究成果の講演が印象的であった。

学会の全体的な印象

過去5年間のIMAGEを振り返ると、カーボンニュートラル達成に向けた社会情勢の変化の中で、二酸化炭素の地下貯留、地熱、天然水素、クリティカルミネラル（経済・安全保障上重要で供給リスクが高いと評価される鉱物資源）など、従来の石油・天然ガスにとどまらないエネルギー資源開発の取り組みが大きく多様化していることが印象的だった。この動向は単なる学会発表にとどまらず、IMAGE2025では例年どおり大規模な展示会が開催され、260以上の企業・団体が様々な最新の機器、ソフトウェア、サービスを出展し、会場は実装志向のデモンストレーション

で大いに賑わっていた。また、IMAGEは人材育成や人材交流の場としても機能しており、学生や若手研究者・技術者による積極的な講演・参加に加え、アーリーキャリア向けセッションや、様々なネットワーキングイベントも開催された。世界各地から多様な人材が集うエネルギー資源開発の最前線は、まさにダイバーシティ、エクイティ&インクルージョン（DE&I）の実践の場である。

今回の学会参加を通じて、地質学と物理探査学がエネルギートランジション時代の基盤科学であることをあらためて実感するとともに、国際社会において産学官が一体となって取り組むエネルギー資源開発の熱気とダイナミズムを強く感じる事ができた。

※ [期間限定] 再販記念キャンペーン!! ※2025年10月から2026年3月末まで

学会オリジナルフィールドノート

～ 会員・非会員問わず 800 円でお分けします～



ご好評いただいております、学会オリジナルフィールドノートの再販を開始いたします。今回増刷分より価格改定いたします。また、10冊以上のご注文には割引価格を設けました。ノートの仕様にほぼ変更はありません（しおり紐がなくなりました）。名入れサービスもこれまで同様に承ります（有料）。

ビニールコーティングの表紙は、水や摩擦・衝撃にも強く野外調査に最適です。ぜひご活用ください。

通常価格（2026年4月以降）

定価 **1200 円**（会員頒価 **900 円**）

（注）10冊以上おまとめ購入の場合、
定価 1100 円（会員頒価 800 円）

サイズ：12×19cm,

中：レインガード紙使用、2mm 方眼、

カバー：ハードカバー、ビニールコーティング、
金箔押し、

色：ラセットブラウン（小豆色）

ご注文・お問い合わせは、学会事務局まで

電話 03-5823-1150 FAX 03-5823-1156 e-mail: main@geosociety.jp

第24回地震火山地質 こどもサマースクール御嶽山 実施報告

道家涼介（弘前大学）

1. はじめに

地震火山地質こどもサマースクールは、日本火山学会と日本地震学会の共同により1999年に地震火山こどもサマースクールとして開始し、2011年から日本地質学会が加わり実行委員会組織を構成して実施している普及事業である。

24回目となる今回は、令和7（2025）年8月5日（火）・6日（水）の2日間にわたって、御嶽山周辺地域の内、長野県側のエリアを舞台に実施された。本稿では、その報告を行う。

2. 地震火山地質こどもサマースクール御嶽山の概要と計画

第24回地震火山地質サマースクール（以下、サマースクールとする）は3学会および御嶽山火山マイスターネットワーク、名古屋大学大学院環境学研究科附属地震火山研究センター、木曽おんたけ観光局の主催で実施された。3学会の講師および主催団体のメンバーで構成された実行委員会を立ち上げ、準備及び当日の運営を行なった。なお、本事業は3学会からの負担金に加え、一般財団法人日本民間公益活動連携機構「休眠預金等活用事業」の助成を受けて実施した。

当日の運営に関わるスタッフは、3学会の運営委員9名、LOCとして39名（地元学校教員15名、信州大学生5名を含む）の合計48名であった。これ意外に12名の方（事前準備、次年度開催地、見学者）にご協力をいただいた。参加者は37名で、内訳は小学生15名、中学生18名、高校生4名であった（長野県木曽郡からの参加者9名を含む）。

第24回サマースクールは「御嶽山はなぜ大きいのか？」というテーマが設定され、参加したこどもたちが3つの謎を解き明かすといったストーリーで展開された。3つの謎とは「1. 御嶽山はなぜ大きいのか。どうやって大きくなったのか。これから大きくなるのか?」、「2. 御嶽山は他の火山とどう違う?特徴や魅力を見つけよう。」、「3. これから、御嶽山の近くで私たちはどのように暮らそう?私たちの楽しみ方、暮らし方、備え方について提案しよう。」である。

3. プログラム

1日目の朝、木曽郡木曽町の文化交流センターに集合した

37名の参加者は、御嶽山周辺を構成する地形や地名などにちなんだ名前の6つのチーム（田の原、剣ヶ峰、三の池、木曾川、新滝、開田高原）に分かれ、オリエンテーションに臨んだ。土井恵治実行委員長（長野県火山対策アドバイザー・土佐清水ジオパーク）から3つの謎の発表があった後、山の大きさとはどういうことかを各グループで話し合い、発表を行った。サマースクールでは、コーディネーターや講師は一切答えを言わない代わりに、講師からの質問への回答、講師への良い質問などに対してカードを渡すことで、参加者の自発的な考えや発言を促す仕組みがとられており、ここでのやり取りが、参加者にとって最初のカード獲得の機会となった。

その後、文化交流センターから徒歩で木曾川親水公園まで移動し、木曾川の川床を構成する地層の観察を行った。現地では、竹下欣宏講師（信州大学）によるペットボトルの堆積実験などを通して地層は水平に堆積することを学んだ一方で、この場所では地層が立って分布していることなどに気がつく参加者もいた（写真1）。加えて、生痕化石の存在に気がついた参加者もいたようであった。また、金幸隆講師（名古屋大学）により、川にせり出すようにしてつくられた特徴的な建物の景観（崖家づくり）についても紹介された。

木曽町文化交流センターに戻った参加者は、バスに乗り込み、次の観察地点である九蔵峠に向けて移動をした。バスの中でも、周囲の地形や景観について参加者から積極的な発言があったほか、地元の御嶽山火山マイスター（以下、マイスター）からは、地元で採れる農産物などの話もあった。九蔵峠では、御嶽山を眺望し、その地形を観察する予定であったが、生憎、雲がかかった状態で、その全貌を見ることは叶わなかった。しかしながら、時間の経過とともに、若干雲が晴れ、一部の地形を観察することができた。ここで、見えている範囲のどこまでが御嶽山かという竹下講師からの問いかけに対し、あらかじめスケッチブックに用意された写真に、チームで相談して御嶽山の範囲を書き込むというワークを実施した。それぞれのチームが自分達の考えを発表したもの、ここで竹下講師を唸らせる回答ができたチームはなかった。また、九蔵峠では、同箇所に出露しているチャートについても観察を行った。

次に参加者は、開田高原にある木曾馬の里を訪れた。同箇所は山体崩壊により形成された流れ山が分布する特徴的な地形の場所であるが、この場所の地形を観察したのちに、砂山を崩す山体崩壊の実験を講師らが実施し、それを観察した。

午前中のフィールドワークののち、参加者は開田中学校に移動し、昼食休憩をとった。その後、午後の最初の活動として、同中学校にて御嶽山の成り立ちを解き明かすため



左から、写真1 木曾川親水公園におけるペットボトル堆積実験と地層観察の様子、写真2 開田中学校での実験の様子



写真3 フォーラムにて自分たちで考えた謎の答えを発表する参加者たち

の3つの実験を実施した。実験担当は、川上明宏講師（マイスター）と筆者である。最初の実験は「山を立体的に観察してみよう」というテーマで、赤青メガネとアナグリフを用いて、御嶽山周辺の地形の立体視を行った。周囲の谷が深いことや、山頂付近に火口があること他、木曽馬の里でみた流れ山の地形に対応する凹凸に気がついた参加者もいた。2つ目の実験は、「ネバネバの溶岩が流れたらどんな地形ができる？」というテーマで、コンデンスミルクとココアパウダーを溶岩流に見立てて、それを傾けることによりどのようなことが起こるかを観察した。3つ目の実験は、「たくさんの土砂を谷に流してみよう！」と題し、プラスチック製のダンボールシートを折り曲げて作った谷に水を流し、そこに砂を流すという実験を行った。少量の砂を流した場合と、たくさんの砂をながした場合でどのような違いができるかを観察した（写真2）。

実験終了後は、王滝川の河原に移動し、石拾いを行った。同箇所には、御嶽山やその周辺に分布する様々な種類の礫が分布するが、それらを拾ったのち、チーム内で相談して、その特徴（色や形、肌触りなど）に基づいて分類を行った。

王滝川での石拾いの後は、宿泊地である「おんたけ休暇村」に移動し、夕食をとった。夕食後は、夜のお話として、参加者は、「御嶽山の地形の話（金講師）」、「御嶽山を作っている岩の話（竹下講師）」、「御嶽山の生き物の話（マイスター・池田信三氏、三澤立氏）」、「御嶽山周辺の文化や暮らしの話（マイスター・澤田義幸氏）」の4つの話の中から、興味のある分野の話を2つ選択し、それぞれの講師がいる部屋に話を聞きに行った。その後は、各チームに分かれて、3つの謎について、現時点でどこまでわかっているのか、何が分かっていないのかを話し合い、1日目の振り返りを行った。最後に、参加者は天体観測を行いサマースクール1日目の活動を締め括った。

2日目の早朝、参加者は、御嶽山中腹の田の原（標高2180m）まで移動し、御嶽山の地形を間近に観察した。朝食前の早朝であったため、この部分については希望者のみの参加としたが、多くの参加があった。田の原の展望台からは、1日目に訪れた開田高原方面を見る予定ではあったが、生憎の天気で見えることは叶わなかった。帰りがけには、雲が晴れ、一部分であるものの御嶽山の地形を観察することができ、田の原付近で平らな地形が形成されていることや、1984年の地震で崩れた御嶽崩れの地形などを観察することができた。

宿泊施設にて朝食をとった後、参加者らは新滝に移動し、溶岩流の先端に形成された滝の地形とその周辺を構成している岩石の観察を行った。新滝へ登る歩道の入り口付近には、これま

でも何度も登場してきたチャートが露出しており、これが放散虫からできている岩石であることなどについて竹下講師から説明があった。また、地元のマイスターの方からは、滝行のために多くの方が訪れる滝であることも紹介された。

新滝を後にした参加者らは、道の駅「三岳」に併設された、御嶽山ビジターセンターへとテラス三岳に移動し、ここで、3件の講義・ワークショップを交代制で受けた。1つ目は、寺川寿子講師（名古屋大学）による講義「地震波から地球の声を聴く」で、地震やプレートテクトニクスの基礎から、御嶽山周辺で発生する地震についてお話があった。2つ目は、土井実行委員長による講義「御嶽山とうまく付き合うために」で、2014年噴火時に多くの犠牲者が出たこと、火山防災や、火山の監視体制のなどについて話があった。両講義とも、興味を持った参加者から、積極的な質問があった。3つ目は、堀江雅恵講師（名古屋大学）による防災ワークショップである。参加者らは、事前の宿題で考えてきた、火山のふもとで暮らす際の備えや火山に登る際の準備をポストイットに書き出し、さらに、今回のサマースクールで学んで、その考え方がどの様に変わったかを書き出し、それらを模造紙に貼り、お互いの考えを共有し、火山とうまく付き合っていくための備えについて考えた。

さとテラス三岳での講義・ワークショップ終了後は、木曽町文化交流センターに戻り、チームごとに、2日間で学んだことをフォーラムで発表するための準備をした。発表準備の間、フォーラムの第1部として、「お山が教えてくれること～歩き、学び、伝えたいふるさとの宝～」と題したパネルディスカッションが行われた。パネルディスカッションに先立ち、金講師から「御嶽山はどんなところ？」と題した基調講演が行われた。その後、土井実行委員長をコーディネーター、傘本靖氏（長野県山岳総合センター）、池田信三氏（マイスター・木曽町教育委員会）、野田智彦氏（マイスター・木曽町職員）をパネラーとし、会場を巻き込む形で、学習登山に関する活発な議論が行われた。フォーラムの第2部では、チームごとに、2日間での学びをまとめたものを書画カメラでスクリーンに映し、自分たちが学んできたことを発表した（写真3）。発表では、御嶽山が大きい理由として、火口が沢山あることを挙げたチームが多かったが、隆起により御嶽山の土台自体がそもそも高い位置にあるということに気がついたチームもあった（フォーラム準備の段階で、そのことに気がついていたチームは他にもあったが、最終的な発表まで至ったのは1チームであった）。発表では、クイズ形式で富士山と御嶽山の違いを紹介したり、拾ってきた石をスクリーンに投影したりなど、様々な工夫が見られ、いずれの発表も参加者が自分たちなりの答えを表現した素晴らしい発表であった。各発表の後には、コメンテーターとして参加された木曽町の小林昌治教育長、王滝村の吉田英司教育長、開田小学校の奥原成子校長（木曽町校長会会長）および実行委員長・講師からコメントがあり、いずれの発表も好評であった。閉会式では、土井実行委員長から修了書が、澤田義幸御嶽山火山マイスターネットワーク会長からはジュニアマイスターの認定書が授与され、サマースクールの2日間の日程が幕を下ろした。

4. おわりに

参加者にとって充実したサマースクールになるように、地元のマイスターの方々を中心に、様々な立場の方々が全面的に協力し、イベントの運営を成功に導いていただいた。この場を借りて、感謝申し上げる。

なお、2026年度は三陸ジオパークエリア内の宮城県気仙沼市で開催の予定である。学会員の皆様には引き続き、本事業へのご理解とご協力を賜りたい。

日本地質学会中部支部2025年度支部年会 参加報告

名古屋大学大学院 環境学研究科
博士前期課程 1 年
外山和也

はじめに

2025年6月21日と22日に平内健一准教授（静岡大学）を世話人として、静岡大学で日本地質学会中部支部の2025年度支部年会が開催された。年会は21日の昼に総会から始まり、午後はシンポジウムを中心とした研究発表会、夕方に懇親会、翌22日に野外巡検が実施された。年会は経験豊かな研究者だけでなく若手の院生から学部生まで幅広い年代が揃って最新の知見を学んで議論する有意義な機会となった。本稿では、特に研究発表会と野外巡検について報告する。

研究発表会

研究発表会は、シンポジウム、一般講演（口頭発表）、一般講演（ポスター発表）の3セッションで構成された。

シンポジウムは「マントル物質研究の最前線」として4件の発表が行われた。森下知見教授（金沢大学）の講演では、台湾東部のLanyu島およびフィリピンのPinatubo火山の超苦鉄質捕獲岩の岩石学的特徴からマントルの普遍性や多様性について議論された。田阪美樹准教授（静岡大学）の講演では、日高変成帯南縁部の幌満かんらん岩体から、メルトが与えるマントルのレオロジー特性や岩石組織への影響が示唆された。大柳良介博士（国士舘大学）の講演では、地球化学モデリングを用いることで、沈み込む堆積物から放出される流体化学組成の傾向について議論された。沢田輝博士（富山大学）の講演では、超苦鉄質岩中のアクセサリ鉱物を用いて、その岩体の形成過程を制約できる可能性が示された。

シンポジウムの講演時間は30分と長く設定されていたため、どの講演者もイントロダクションを丁寧に説明されていた。そのため、超苦鉄質岩にあまり馴染みない参加者でも理解しやすい内容であり発表構成の工夫という点でも勉強になった。

一般講演（口頭発表）では4件の発表があった。最初に荒井章司名誉会員（金沢大学）が、Crを含む鉱物の形成における熱水の寄与について講演された。続いて狩野謙一名誉会員（静岡



図1 発表準備の様子 左から出口学生会員、筆者、荒井名誉会員、狩野名誉会員

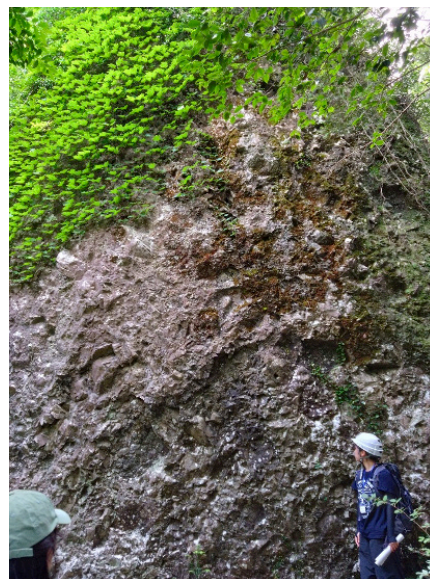


図2 ビク石

大学）が北部フォッサマグナ中～南部の地質構造における最近10年間の新知見について講演された。荒井・狩野両名誉会員は御年70代後半とは思えない精力的な発表だった。次に、筆者を含めた大学院生の講演が2件続いた。筆者は、和歌山三波川帯の藍閃石のマイクロプーディング構造について、出口学生会員（信州大学）は足尾帯南部の白亜紀花崗岩の年代についてそれぞれ講演した。一般講演の口頭発表では講演内容はもとより、その年齢ギャップの大きさ（55歳差）に会場が大ききなどよめきが起こった（図1）。

一般講演（ポスター発表）では、講義室の1室がポスター会場として設営されており、14件の発表があった。紀伊半島東部領家深成岩類のマイロナイト化や、天竜三波川変成帯石英片岩中のアルパイトスポットに記録された塩水の浸透、長崎変成岩類のアクチノ閃石片岩の変形機構についてなど、どの発表もとても興味深い内容であり、終了時間ギリギリまで議論されていた。

筆者は、先述の50歳以上の年齢ギャップで口頭発表した当事者だったのだが、これに関連したエピソードを紹介したい。実は、当初は一般講演でポスター発表するつもりだったのが、応募時に誤って口頭発表で応募したことを年会直前にプログラムを確認して自覚した。すでにポスターを完成させて安心していたのが一転して慌てて口頭発表の準備を始めることになった。口頭発表のスライドを完成させた後、すでに完成していたポスターを勿体なく思ったので、本年会の世話人である平内健一准教授に相談したところ、ご好意で（もちろん番外で）ポスターを掲示させていただけた。そのおかげで、口頭発表に続いてポスターでも研究紹介ができ、気分的には通常の2倍くらいの議論が深められる稀有な経験をさせてもらえた。世話人の平内准教授と参加者の皆さまに感謝申し上げる。

野外巡検

総会・研究発表会の翌日に企画された巡検は、「環伊豆地塊蛇紋岩帯、瀬戸川帯南部の超塩基性一塩基性複合岩類の野外見学」と題され、平内健一准教授と狩野謙一名誉会員らの案内者5名と参加者27名で実施された。

最初の見学地点は静岡県藤枝市石谷山山頂周辺での超塩基性一塩基性複合岩類であり、本体と思われる大きな岩塊（図2）の形状が茶摘みに使う竹魚籠（たけびく）に似ていることから、地元では「ビク石」という愛称で親しまれていた。山頂付近にはビク石と表記された看板や伝承が記された案内板などが設置



図3 石谷山山頂での集合写真

されていた。この岩石は全体として淘汰度が悪く、ほとんど基質の無い礫支持角礫岩であるが、その礫のほとんどが上部マントル～海洋地殻起源の蛇紋岩やはんれい岩などの超塩基性一塩基性で構成されていた。この岩石の特異なところは、そのような“海洋地殻起源の岩石がほとんど移動せずに堆積した”ということであり、その成因について参加者の中で様々に議論が盛り上がっていた。また、山頂付近の展望が良いところで集合写真の撮影も行われた(図3)。

二番目の見学地点は千葉山南西尾根“スカイペンションどうだん”周辺の瀬戸川帯滝沢衝上帯の超塩基性一塩基性複合岩類である。山道沿いにルートを進むと、順に礫岩状蛇紋岩、超塩基性一塩基性複合角礫岩、含礫泥岩と様々な岩相をテンポよく確認できる素晴らしい露頭だった。さらに、最後の含礫泥岩からは所々でマンガンジュールが確認され、これまでマンガンジュールを見たことがなかった筆者には新しい経験だった。

三番目の見学地点は大井川右岸河床に露出する瀬戸川帯メランジュである。この露頭は大井川の河川改修(“平成の大改修”)に伴って河床を開鑿した結果として出現した人口露頭であり、塊状砂岩とメランジュの境界断層が確認できた。さらに、予備ストッとして用意されていた地蔵峠南方から地形を遠望することができ、平成の大改修による地形の変化も感じることができた。

おわりに

本支部年会では、中部支部を拠点とする研究機関に所属する会員と学生会員の研究成果が広く共有されただけでなく、所属の異なる会員や学生会員との交流を広げるよい機会となった。筆者個人としても、自分の発表が優秀発表賞という形で評価されたことや、研究に関して有意義なコメントを頂いたことで、ますます研究意欲を高める事ができた。筆者は本支部年会で発表した内容をさらに検討して投稿論文として執筆中である。今回頂いたコメントも参考にしながら論文完成を目指したい。また、本支部年会の運営に際しては、世話人の平内准教授をはじめ、静岡大学所属の皆様による手厚いサポートのおかげで、研究発表会・野外巡検ともに大きな混乱もなく、円滑かつ快適に進行することができた。この場をお借りして、深く感謝申し上げます。

常時投稿をお待ちしています。編集は、現在以下の6名で行っています。原稿は1500～4500文字程度、図・写真3点以内を目安に、e-mailでお送りください。

吉永巨希(筑波大) koki9824k@gmail.com

福井堂子(愛媛大) teco14.hm@outlook.com

會田幸樹(東京大) aida-koki322@g.ecc.u-tokyo.ac.jp

小坂日奈子(茨城大) 23nm307s@vc.ibaraki.ac.jp

訃報

本会の次の方々が逝去されました。謹んで哀悼の意を表します。

名誉会員	植村 武 (5月14日)	魚住 悟 (9月17日)	石崎国熙 (10月4日)
正会員	古沢 仁 (2023年9月2日)	井上 茂 (2024年8月7日)	橋本邦俊 (2月21日)
	有川隆一 (4月14日)	大橋俊夫 (4月26日)	藤吉 暁 (5月12日)
	後藤博弥 (5月15日)	原田正史 (9月22日)	

学 会 記 事

2025年度第1回執行理事会議事録

日程：2025年7月7日（月）18:30-20:10

【WEB会議】

出席：山路 敦、杉田律子、亀高正男、内野隆之、岩井雅夫、内尾（坂保）優子、大坪 誠、尾上哲治、加藤猛士、小宮剛、坂口有人、高嶋礼詩、辻森 樹、細矢卓志、松田達生、矢部 淳、山口飛鳥

監事：山本正司、岩部良子

事務局 澤木

欠席：星 博幸、

*定足数（過半数：10）に対し、執行理事17の出席

*前回24-14議事録案は、本執行理事会にて承認された。

報告事項（理事会報告の確認）

1. 全体的報告

・6/15に自然史学会連合の総会がオンラインで開かれた。国立沖縄自然史博物館の招致活動に積極的に参加していることなどが紹介された。今年度の講演会・体験教室が11/1に島根大学エスチュアリーセンターで開催されるので（講演会はハイブリッド）、協力頂ける学会は申し出てほしいとのこと。

・熊本大会期間中に執行理事会を対面で開催予定。

2. 運営財政部会（加藤・細矢）

1) 総務委員会

＜共催・後援依頼、他団体の募集、連絡等＞

・地学オリンピック日本委員会より2025年度の協賛団体加入依頼があり、承諾した。協賛金4口（20万）送金予定。

・第66回東レ科学技術賞および東レ科学技術研究助成の候補者推薦依頼があった（10/10締切）（学会締切9/12）【→ニュース誌、geo-flash掲載】

・2025年度朝日賞候補者推薦依頼があった（8/26締切）（学会推薦8/1）【→ニュース誌、geo-flash掲載】

・第47回（令和7年度）沖縄研究奨励賞推薦依頼があった（9/30締切）（学会推薦9/1）【→ニュース誌、geo-flash掲載】

・ヒマラヤ野外実習プロジェクトより2025年度活動（2026年3月実施予定の野外実習プログラム）に対する学会推薦の希望が寄せられた。緊急時連絡体制と参加希望学生の教官・大学への届け出に関しどのようにしているかを先方に問い合わせた上で対応を検討することとした。

＜会員＞

1. 今月の入会者（2団体、94名）

賛助会員（2社）株式会社テクノアース、八洲開発株式会社

ジュニア会員（1名）花田達也

正会員（93名）

一般会員（10名）浅森浩一、Abdelrahman Yasser、出本紀子、櫻井健一、瀬戸口怜子、高林佑灯、Dandar Otgonbayar、花室孝広、本宮圭悟、山田茂昭

学生会員（学生会員（83）単年度：29、2年バック：34、3年バック：19、チェック無し（不明）：1）新井仁菜、荒木 悠、石井義弘、泉 憲志郎、板倉義空、市澤佑太、井藤隼斗、岩田琉空、上岡竜貴、鶴澤直己、梅宮穂花、榎村彩羽、大曾根司昂、大部悦子、岡田花、垣内拓馬、川口昂大、河端康佑、木内翔太、清原 愛、熊谷汐莉、権藤洗人、齊藤大晃、坂元 翔、坂元伸晟、佐藤碧人、佐藤久遠、嶋田 翔、清水 空、庄司瑞輝、正田陽宏、白井大地、菅 敦成、杉本健人、鈴木康平、関川真佑子、関谷優輝、高見柊二、瀧本秀男、武富真由、田次将太、田邊凌雅、俵直弥、塚田結衣、土田 和輝、徳川 聡、豊留一輝、永井嵩也、中澤明子、中村 領、中屋敷実春、中山雄介、鳴海慎人、西山 烈、橋本周汰、橋本優生、畑中 衛、濱垣貴也、濱野裕大、日比絵里奈、日比野翔吾、平井悠河、平田悠馬、福田颯亮、福田 成、福原将太、星 恒太郎、堀田大翔、松井和己、松原 美友、三木 志緒乃、皆川泰輝、Munusamy Annadurai Swarnaa、村山 燎、室井颯太、山内大樹、山口純平、山田 陽翔、山中壮馬、八幡伊織、吉田恵太、吉田雄博、LIAO Xin

2. 今月の退会者：8名

正会員シニア（1）松岡弘和

正会員一般（7）青木夢葉、石川圭一郎、河崎 陸、矢口朔子、池津雄地、鈴木岳斗、大島温志

3. 今月の逝去者：2名

正会員シニア（2）古沢 仁（逝去日：2023年9月2日）、井上 茂（逝去日：2024年8月7日）

4. 2025年6月末会員数

賛助：37、名譽：33、ジュニア会員：6、正会員：3034〔うち一般1971、シニア886、学生177〕合計 3110（昨年比-76）

＜会計＞

・自然史学会連合2025年度分担金（20,000円/年）を納入した。

＜その他＞

・オンラインストレージの利用開始について：事務局のPCにTEAMSの機能を追加して、理事会、執行理事会、事業部会の委員会と専門部会、その他の委員会や各支部を対象として、TEAMSを共有サーバとして文書の保管や交換等に利用していただく。容量は10GBを上限として、各委員長、部会長、支部長等から利用希望を募る。

・事務局の有給休暇取得促進による事務局休業日について：現在は事務局員2名が交代で勤務し、平日は誰かが対応できるようにしているが、今後は同時に休む日を設ける。直近では、休日に挟まれた9/22（月）を有給休暇取得促進日とし事務局を休業するなど、飛び石で少し長い連休となる日

を有給休暇取得促進日として設定する予定。休業日については、メールマガジンなどで周知する。

3. 広報部会（坂口・内尾・大坪・松田）

1) 広報委員会（坂口・内尾）

・ホームページリニューアルについて、業者からサイトマップの整理案が提出された。
・地質学者に答えてもらおう（Q&A）のコーナーの担当を一部シニア会員にお願いする予定。

4. 学術研究部会（辻森・尾上・高嶋・山口）

1) 行事委員会（高嶋・山口）

・2025熊本大会：講演申込受付中（7/9締切）。大会参加登録、巡検の申込受付を6月末より開始した（9/1締切）。7/12（土）行事委員会プログラム編成会議を予定。展示関係申込状況（7/4現在）：企業展示7社、7小間（検討中1含む）、パネル小間2社2小間、書籍販売4社6小間。

・2027つくば大会：7/14（月）LOC会議&つくば国際会議場現地地下見予定。高嶋行事委員長、事務局（澤木）出席予定。

・その他：2023京都大会の巡検案内書について、未完成2コース中の1件の原稿が投稿された。

2) 専門部会連絡委員会（尾上）

特になし

3) 国際交流委員会（辻森）

特になし

4) 地質標準化委員会（内野）

・産総研のシームレス地質図の凡例の時代名について、最新の地質年代表に対応した。（該当は、イブレスアン、バランジニアンの2か所）

5) 学術戦略WG（尾上）

特になし

6) ショートコースWG（山口）

特になし

5. 編集出版部会（小宮・辻森）

1) 地質学雑誌編集委員会（小宮）

（1）編集状況報告（2025年7月6日現在）

・2025年投稿論文：26（昨年比-6）〔内訳〕総説1（和文1）、論説13（和文11、英文2）、報告1（和文1）、レター2（和文2）、ノート1（和文1）、フォト1（和文1）、巡検案内書7

査読中27、受理済み4、入稿・校正中8、公開12

2) Island Arc編集委員会（辻森）

インパクトファクターが1.3に確定。山路会長より、日本語要旨の添付を復活できないかという意見があったが、編集委員会としては、校閲や外国人著者原稿の日本語訳など負担が増えるため現実的ではないとの見解が示された。

3) 企画出版委員会（小宮）

特になし

6. 社会貢献部会（矢部・岩井・坂口）

1) 地学教育委員会（岩井）

特になし

2) 地質技術者教育委員会（加藤）

- ・地質系業界説明会の募集結果：応募総数は48企業・団体、うち40企業団体が対面説明会に参加（紹介資料は大会HPに掲載）、7企業・団体が紹介資料を大会HPに掲載されることとなった。学生・教員によるブース訪問を増やすよう、理事はじめ会員に周知する。また、熊本大会のスポンサー企業として3社からの応募をいただいた（7/31締切で受付中）。
- 3) 生涯教育委員会（矢部）
特になし
- 4) 地震火山地質こどもサマースクール（岩井）
サマースクールの公募趣旨・応募要項に関する説明会が6月26日に開催され、福井県勝山市が参加。恐竜関係のスクーリング開催に際して運営の参考にしたいとのこと。質疑応答を経て、本年度の御嶽大会にボランティア参加していただくことになった。
- 5) 地質の日（矢部）
特になし
- 7. その他執行理事会の下に設置される委員会及び組織
- 1) 利益相反マネジメント委員会（亀高）
特になし
- 2) 若手育成事業検討WG（内野）
特になし
- 3) 表彰制度検討WG（亀高）
特になし
- 8. 理事会の下に設置される委員会
- 1) ジオパーク支援委員会（矢部）
特になし
- 2) 地学オリンピック支援委員会（坂口）
特になし
- 3) 支部長連絡会議（杉田）
特になし
- 4) 地質災害委員会（松田）
特になし
- 5) 名誉会員推薦委員会（星）
特になし
- 6) 各賞選考委員会（亀高）
特になし
- 7) ジェンダー・ダイバーシティ委員会（山口）
特になし
- 8) 法務委員会（亀高）
特になし
- 9) 若手活動運営委員会（星）
特になし
- 10) その他
- ・シニア会員活躍アンケートで、事務局の事務サポートを希望された関東在住の方に、これから作業依頼を打診予定。
- 9. 研究委員会
- 1) 南極地質研究委員会（委員長 大和田正明）
特になし
- 2) 法地質学研究委員会（委員長 川村紀子；杉田）
特になし

審議事項

- シニア会員の活躍に関する事業（山路）
情報発信のできるシニア会員への新たなサービスのひとつとして、ニュース誌への寄稿を提案する。地質の重要な歴史を後世に伝えることを目的に「Geologist物語」コーナーに投稿して頂きたい。まずは執行理事レベルで執筆依頼を行う。退会されたシニア会員でも適任者がいれば、その方の投稿も排除しない。
- 選挙管理委員の選出と投票率向上のための施策について（亀高）
委員候補者に打診し、9月理事会に推薦予定。前回から電子投票システムを採用したが、投票率が低かった。投票率向上のために、前回の分析や電子投票が難しい会員への対応（例えば、紙での投票）についてより考えていく必要がある。会員番号不明のために電子投票を諦めた会員が一定数いると推測される。会員カードでの会員番号の確認を呼びかけるとともに、選挙の実施および投票の呼びかけをできるだけ早めに実施する。

監事コメント

（山本監事）ヒマラヤ野外実習プログラムの学会推薦については、事故の際、学会側の責任も問われる可能性があるので、緊急連絡体制、実施計画書、旅行者なども含めしっかりと準備・計画されていることを確認した上で推薦をして欲しい。

（岩部監事）選挙の前回投票率が低かった原因の分析が必要ではないか。会員システムへの会員のログイン状況を確認し、その結果によっても対応は変わってくる。投票は会員すべての大切な権利なので、それを妨げる問題は早めに解消してほしい。

以上

2025年8月4日

一般社団法人日本地質学会
会長（代表理事）山路 敦
署名人 執行理事 亀高正男

2025年度第2回執行理事会議事録

日程：2025年8月4日（月）18:30-20:10

【WEB会議】

出席：山路 敦、杉田律子、星 博幸、亀高正男、内野隆之、岩井雅夫、内尾（保坂）優子、大坪 誠、尾上哲治、加藤猛士、小宮 剛、坂口有人、高嶋礼詩、辻森 樹、細矢卓志、松田達生、矢部 淳、山口飛鳥

監事：山本正司、岩部良子

事務局 澤木

欠席：

*定足数（過半数：10）に対し、執行理事18名の出席

*前回25-01議事録案は、本執行理事会にて

承認された。

報告事項（理事会報告の確認）

- 全体的報告
 - ・特になし
- 運営財政部会（加藤・細矢）
 - 総務委員会
＜共催・後援依頼、他団体の募集、連絡等＞
特になし
＜会員＞
 - 今月の入会者：賛助会員1社、正会員23名
賛助会員（1社） 明大工業株式会社
正会員一般（6） PEPINO MA. MARIVIC CAPITILE、松田法子、木尾竜也、小松哲也（再入会）、西岡芳晴（再入会）、GOWAN EVAN JAMES
正会員学生（17）…単年度（5名）、2年バック（6名）、3年バック（6名） 佐々木勇人、松藤彬成、宍田哲大、河田圭太、中井建琉、西澤ひなた、加藤将人、幡山怜皇、中藤草汰、佐伯拓馬、池田尚史、趙 陽、田口湧一、山田祥一郎、内山賢太、田村航遥、木村幸志
 - 今月の退会者：なし
 - 今月の逝去者：なし
 - 2025年7月末会員数
賛助：39、名誉：33、ジュニア会員：7、正会員：3122（一般1971、シニア886、学生265）合計3201（昨年比+13）
＜会計＞
 - ・増刷予定のフィールドノートは、最終見積の結果、1冊1000円以内で販売できる模様。価格を再検討中。
 - ＜その他＞
 - ・事務局夏季休業：8/15（金）、8/18（月）
 - ・各種委員会、専門部会向けのTEAMSによる共有ストレージの利用を開始した。
 - ・会員資格の「休止」について検討開始した。病気・産休などで一定期間学会に関わらない会員のための制度。総務委員会で原案作成を進める。
 - ・学会会計顧問である篠原通男夫先生（税理士、公認会計士）の退任に伴い、9月頃までに後任の方への挨拶と学会の顧問会計士としての就任を打診予定。
 - ・会員システム上でのクレジットカード決済の実装を進めている。用途は年会費の支払いに限る。
- 広報部会（坂口・内尾・大坪・松田）
 - 広報委員会（坂口・内尾）
 - ・ホームページリニューアルについて：経費の確認も含め、トップのデザイン、サイトの利便性について調整中。新サイトへのコンテンツ移行についても整理中。次回の執行理事会にてデザイン案を紹介予定。
 - 学術研究部会（辻森・尾上・高嶋・山口）
 - 行事委員会（高嶋・山口）
 - ・2025熊本大会：519件（口頭243、ポスター276、※ジュニアセッション27件を含む）の講演を採択した。講演プログラム公開準備中（8月上旬予定）。大会参加登録受付中

(9/1締切). 巡検申込 (8/12締切) は9コース中4コースが定員に達した. Gコース(阿蘇ジオパーク;アウトリーチ巡検)については, 都合により一部案内者の変更が発生する見込み. 申込者に対して速やかの変更の連絡をおこなう.

- ・2026金沢大会: 日程は9/13-15. 金沢大LOC幹事の森下氏の案内で, 金沢大学予定会場の下見を実施. バス輸送に関して問題があるものの, ポスター会場, 企業展示, 業界説明会, 講演会場については1か所で行うことができ, 開催に問題ないことを確認した. 業界説明会については, ポスターと同じオープンスペースか, 個別の部屋かの2つの選択肢がある. ポスター・企業展示の会場は無料で, コンセントも十分あり. 市民講演会は従来通り共同で行うが, 地質情報展については福井で実施する予定. その場合も学術大会と同時開催(共主催)として科研費を申請予定. 巡検については, 確実に実施が決まり次第, ウェブサイトに掲載する.

- ・2027つくば大会: 関東支部および筑波大LOCとともに国際会議場の下見を実施. 各講演会場, 授賞式会場, ポスター会場について具体的な部屋および利用時間を想定し, 見積作成中.

・その他

2023京都大会巡検Aコース「京都盆地-奈良盆地断層帯とその周辺の第四系」の巡検案内書は査読が終わり, 著者修正中.

- 2) 専門部会連絡委員会 (尾上)
特になし
- 3) 国際交流委員会 (辻森)
特になし
- 4) 地質標準化委員会 (内野)
特になし
- 5) 学術戦略WG (尾上)
特になし
- 6) ショートコースWG (山口)
 - ・開催テーマの検討を進めている. 加えてシニア会員を講師として依頼できないか検討中.
5. 編集出版部会 (小宮・辻森)
 - 1) 地質学雑誌編集委員会 (小宮)
 - (1) 編集状況報告 (2025年8月6日現在)
 - ・2025年投稿論文: 31 (昨年比-6) [内訳] 総説1 (和文1), 論説16 (和文14,英文2), 報告1 (和文1), レター2 (和文2), ノート2 (和文2), フォト1 (和文1), 巡検案内書8
 - 査読中27, 受理済み8, 入稿・校正中2, 公開20
 - 2) Island Arc編集委員会 (辻森)
 - ・層序, 堆積系の投稿原稿が少ないが, 投稿状況は順調に推移している
 - 3) 企画出版委員会 (小宮)
特になし
 6. 社会貢献部会 (矢部・岩井・坂口)
 - 1) 地学教育委員会 (岩井)
 - ・熊本大会ジュニアセッションは13校27件の

申し込みがあり全て採択. 他の学術発表同様に講演プログラム・要旨の公開準備中.

- 2) 地質技術者教育委員会 (加藤)
 - ・地球・資源分野JABEE委員会: 「2024年度事業報告・収支決算書」ならびに「2025年度事業計画・収支予算書」に対する監査結果の報告があった.
 - ・「地質系若者のためのキャリアビジョン誌」の活用拡大策 (案) (坂口) 【→審議事項へ】
- 3) 生涯教育委員会 (矢部)
特になし
- 4) 地震火山地質こどもサマースクール (岩井)
特になし
- 5) 地質の日 (矢部)
特になし
7. その他執行政理事会の下に設置される委員会及び組織
 - 1) 利益相反マネージメント委員会 (亀高)
特になし
 - 2) 若手育成事業検討WG (内野)
特になし
 - 3) 表彰制度検討WG (亀高)
特になし
8. 理事会の下に設置される委員会
 - 1) ジオパーク支援委員会 (矢部)
特になし
 - 2) 地学オリンピック支援委員会 (坂口)
 - ・アースサイエンスフェスティバル (日本, 台湾, 韓国)の3か国で行う合同研修が来年日本で開催. 地学オリンピック支援委員会として協力していく.
 - 3) 支部長連絡会議 (杉田)
 - ・熊本大会時に会合を予定している.
 - 4) 地質災害委員会 (松田)
特になし
 - 5) 名誉会員推薦委員会 (星)
特になし
 - 6) 各賞選考委員会 (亀高)
特になし
 - 7) ジェンダー・ダイバーシティ委員会 (山口)
特になし
 - 8) 法務委員会 (亀高)
特になし
 - 9) 若手活動運営委員会 (星)
特になし
 - 10) その他
特になし
9. 研究委員会
 - 1) 南極地質研究委員会 (委員長 大和田正明)
特になし
 - 2) 法地質学研究委員会 (委員長 川村紀子; 杉田)
特になし

審議事項

1. 選挙管理委員会 委員の選出

2026年度代議員選挙および理事選挙・監事選挙を実施するにあたり, 選挙管理委員会の委員5名を理事会に推挙する. 荒井健一 (アジア航測株式会社), 牛丸健太郎 (産業技術総合研究所), 栗原敏之 (新潟大学), 郡山鈴夏 (フォッサマグナミュージアム), 白井正明 (東京都立大学)

2. 「地質系若者のためのキャリアビジョン誌」の活用拡大策 (案) (坂口)

現在, 全国の48の大学・機関へ50部ずつ無料配布しているが, より広範に配布・活用してもらうために, 希望があれば有償にて追加配布を行いたい. 追加分については, 大学側に100円/冊程度の負担をお願いし, 残りは学会負担で作成する. 学会側で負担をするかどうかは継続審議. 次回理事会で各大学における冊子の活用状況について意見を伺い, 議論の参考にする.

3. 地質学雑誌「報告」カテゴリの廃止について

「報告」の規定には「議論を含まない」とあるが, 実際は議論が含まれることも多く, それらの程度の基準は曖昧な現状がある. 規定の明確化で改善できるかあるいは廃止するか, 継続して審議していく. 特に, 廃止する場合は, 「報告」以外のカテゴリで対応できるか, あるいはデータリポジトリ的な受け皿を用意するか検討する.

4. 理事会審議事項の確認

- ①選挙管理委員会の設置と選挙スケジュールについて (亀高)
- ②2026金沢大会の巡検コース (高嶋)
- ③「地質系若者のためのキャリアビジョン誌」の活用拡大策 (案) (坂口)
- ④その他

監事コメント

(山本監事)

熊本での学術大会は是非成功を収めてほしい.
(岩部監事)

地質学雑誌の「報告」について廃止の議論がなされたが, 他のカテゴリも含め規定についてしっかり整理してほしい. 選挙については投票率が上がるように進めてほしい.

以上

2025年9月6日

一般社団法人日本地質学会
会長 (代表理事) 山路 敦
署名人 執行理事 亀高正男

白山—白川郷ホワイトロードの瓢箪（ふくべ）大滝をつくる流紋岩質レオイグニンプライトの枕状溶岩

Rhyolite rheoignimbrite forms giant pillow lobes in the Fukube Fall, Hakusan-Shirakawago White Road

写真・文：海野 進（金沢大学）

石川—岐阜県境をまたぐ白山—白川郷ホワイトロードに沿って70 Ma頃に噴出した（金子ほか, 2019）流紋岩質イグニンプライト（火砕流堆積物）が大規模に露出する。このイグニンプライトは少なくとも数枚のフローユニットからなる溶結部・非溶結部の互層で、全層厚は1300 mを越える（竹中ほか, 1976）。これらのうち中下部にあたる溶結イグニンプライトは、瓢箪（ふくべ）大滝がかかる高さ100mを越える崖に枕状溶岩ローブとなって、東西320mにわたり大規模に露出する（Umino, 2025）。径1 mから10 mを越える巨大な枕状溶岩ローブは、厚さ30 cm以上のオブシディアンガラスの急冷縁で縁取られ、分岐する方向と伸張したローブの傾斜方向から概ね北東～東へ向かって流下したと考えられる。基本的に陸上噴火・堆積したイグニンプライトの間に、レオイグニンプライトの枕状溶岩が挟在することから、イグニンプライトによって河川が堰止められて一次的に浅いダム湖を生じ、その後溶結・流動したレオイグニンプライトが湖に流れ込み、枕状溶岩となったと考えられる。陸上噴火・堆積の流紋岩質イグニンプライトが枕状溶岩を形成した報告は、知りうる限りは本件（Umino, 2025）の他になく、きわめて珍しい。元より高粘性の流紋岩質レオイグニンプライトが破碎することなく枕状溶岩ローブを形成できたのは、高含水量を保ったまま噴出したイグニンプライトであったこと、イグニンプライト下に埋積した谷底の伏流水が加熱され、

発生した高蒸気圧下で溶結が促進された結果、低粘性のレオイグニンプライトとなったと考えられる（Umino, 2025）。

本写真はドローンの空撮映像から作成した。滝の落ち口から滝壺までの落差90.6 m。

以下のURLから3Dモデルをダウンロードできる：

https://drive.google.com/file/d/1I-yvUqcXQyD-TuENJ9ZzQ04x3rkYhgcz/view?usp=drive_link

引用文献

金子一夫・長田充弘・高地吉一・山本鋼志・大藤 茂, 2019, 富山県に分布する太美山層群のジルコンU-Pb年代. 地質雑誌, 125, 781-792.

竹中修平・東野外志男・山崎正男, 1976, 白山北方蛇谷地域の酸性火砕岩類について. 石川県白山自然保護センター研究報告, 4, 1-17,

<https://www.pref.ishikawa.lg.jp/hakusan/publish/report/documents/report4-1.pdf>

Umino, S., 2025, Pillow flows of rhyolite rheoignimbrite exposed in the Fukube Falls, Hakusan-Shirakawago White Road. J. Volcanol. Geotherm. Res., 468, 108444, <https://doi.org/10.1016/j.jvolgeores.2025.108444>

日本地質学会 キャリアビジョン誌2025掲載企業募集

日本地質学会では、本年も地質学を専攻とする国内44の大学の2,200名以上の学生と院生に日本地質学会の情報誌「地質系若者のためのキャリアビジョン誌」を送り届ける予定です。各大学では、この弊誌をキャリア教育の教材として活用頂いており、そして多くの学生・院生から専門職を知る機会になったとの声が届いており、日本地質学会は多くの若者が最新の地質学を学び、そしてその能力を活かせる職に就き、社会の発展に寄与してくれることを願っています。

つきましては、本年も協賛と原稿提供いただける企業を募集しています。

原稿形式：A4縦、PDF形式、20MB以内、塗り足しは対応していません。

申込締切：2025年12月19日（金）（原稿提出）

申し込み：下記フォームよりお申し込みください。

<http://photo.geosociety.jp/career2.html>

配布予定：2026年1月下旬

協賛費：3万円（日本地質学会賛助会員は1掲載地区分無料）

掲載数：のべ131社（2024年度実績）以上の見込み。地質業界最大の雑誌です！

掲載順番：全国区と地方地区とに章立てして掲載（複数地区を希望される場合は1地区あたり3万円の追加料金になります）

内容：会社の特徴、仕事の魅力、やりがいなどキャリア教育に資するものとし、採用人数や給与など具体的すぎる求人情報はご遠慮下さい。

担当・連絡先：日本地質学会地質技術者教育委員会

担当：坂口有人 arito@yamaguchi-u.ac.jp



2026 年度からの学生会費の申請について

申請締切：2025 年 12 月 1 日（月）

一般社団法人日本地質学会運営規則により、学部学生・院生は、本人の申請により“学生会員”としての会費が適用されます。下記をよく読んでお手続きください。なお、過年度に遡っての申請はお受けしません。2026 年度会費から適用とします。また、これから入会される方には申請締切はありません。新入会には期日はありませんので、入会時にお手続きください。

学生会員の会費額は次の通りです。

単年度：5,000 円／2 年パック：8,000 円／3 年パック：9,000 円

対象者は次の方々となります。

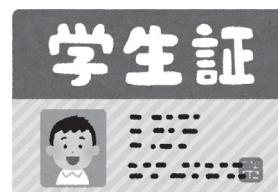
- ・2025 年度会費までで学生会費申請が期限切れになる方
- ・現在、学生会員 2026 年 3 月末付で学生証の有効期限が切れる方
- ・2025 年度会費にかかる学生会費の申請を忘れた方
- ・大学学部、大学院、高等専門学校の 4 年生以上に在籍する方で、学生証の写しによりその在籍を証明する方
- ・一般会員あるいはシニア会員が社会人大学院生である場合に、学生証の写しによりその在籍を証明する方

なお、現時点で学部学生・院生の身分の方ならば、どなたでも申請可能です。2026 年 4 月から就職が内定している方の申請も受け付けます（下記，3．参照）。

学生会員となる方は、学会 HP 所定の申請フォームから手続きして下さい。注意点は次の通りです。

1. 『学生証の写し』を提出してください

- ①学生証の写しは初回申請時のみご提出ください。通常の在学期間終了までは再申請する必要はありません。例えば、現在学部 2 年次で申請した場合、2 年間（学部 4 年次まで）は申請が無くても学生会員とします。
- ②パック制会費の期間中は都度申請する必要はありません。
- ③指導教員の署名・捺印は必要ありません。
- ④定収の有無は問いません。日本学術振興会や研究機関・財団、所属大学などからの奨励金制度による研究に対する助成金を受給している学部学生・院生の方も申請可能です。



2. 会費の納入方法を選択してください

- ①学生証の写しを提出する際、単年度会費：5,000 円／年の納入か、パック制会費（2 年パック：8,000 円，3 年パック：9,000 円）か、いずれかの納入方法を選択してください。
- ②パック制会費は、申請時一括払いに限ります。

3. 在学期間中（もしくはパック期間中）に身分の変更があった場合の注意点について

- ①在学期間中（もしくはパック期間中）に、就職等で一般会員への会員種別変更があれば、速やかに学会へ届け出てください。
- ②会費はそのまま継続し、会費額の変更はしません。パック制会費の場合は、パック期間が切れた次年度から一般会員の会費を適用します。
- ③ただし、学術大会への参加等は会員種別に応じた参加費の扱いとなります。

問合せ先：日本地質学会事務局 <main@geosociety.jp>

申請は右記 QR コードから！
忘れずに早めにお手続き下さるよう、お願いいたします。



2026 年度の会費払込について

一般社団法人日本地質学会 運営財政部会

一般社団法人日本地質学会運営規則（以下、運営規則）により 2026 年度の事業年度（会費年度）が始まる前までに納入下さいますようお願いいたします。2026 年 4 月～2027 年 3 月の会費額は下記の通りです。

会員資格	2026年4月～2027年3月分会費
正会員（シニア会員・一般会員）	12,000円（※1. 参照）
〃（学生会員） ※学生証の写しを提出した者に限る	5,000円
* 1：学生会員はバック制度による会費の納入方法を選択することができます。ただし、一括納入のみ。 2 年バック 8,000円（2026～2027年度分）／ 3 年バック 9,000円（2026～2028年度分）	
* 2：学生会員の会費は、過去年度に遡っての申請はお受けしません。	

①自動引き落としを登録されている方の引き落とし日は 12 月 23 日（火）です。

2025 年度分会費の引き落とし日は 12 月 23 日です。請求書ならびに引き落とし通知の発行は省略させていただきますのでご了承ください。これより以前に不足額がある場合には加算され、余剰金がある場合はその分を減額して引き落としとなります。通帳には金額とともに「チシツカイヒ」あるいは「フリカエ」「S M B C」など表示されますので、必ずご確認ください。

②自動引き落としをご利用ください。

新たに会費の自動引き落としをご希望の方は、本誌巻末（10 月号ニュース誌巻末）の振替依頼書をご提出ください。一度手続きをしていただきますと、振込みのために金融機関へ出向く必要もありませんし、会費の未納防止にもなります。自動引き落としの申込は随時受付しています。今回（12 月以降に）お申込みいただいた方は、2026 年 6 月の督促請求時に引落させていただきます。

③お振り込みの方

12 月中旬頃までに請求書兼郵便振替用紙をお送りいたします。折り返しご送金下さいますようお願いいたします。

1. 在会年数（会費納入年数）に応じた会費減額について

2023 年度から、正会員は当該年度 4 月 1 日時点で“65 歳以上”のシニア会員と“65 歳未満”の一般会員とに細分しています。シニア会員と一般会員の方のうち、2025 年度会費まで未納がなく在会 40 年あるいは 50 年（連続年数でなくても合計年数でも可）に達した場合は、2026 年度以降の会費からそれぞれ会費減額を行います。

- ・在会 40 年以降 11,000 円（1,000 円割引）
- ・在会 50 年以降 10,000 円（2,000 円割引）

本割引制度は、申請や手続きは不要です。何卒ご承知おください。

2. 除籍対象年数の規則変更について。長期滞納者の会員はご注意下さい。

運営規則の一部改正（2022 年 6 月）により、除籍対象となる滞納年数が『滞納 4 年度目』から『滞納 3 年度目』に変更となりました。該当する方には個別にご案内することとなりますが、くれぐれもご注意下さい。

運営規則第 7 条（会費）第 4 項（4）

- （4）会費支払いの督促を受けつつ、正当な理由なく、かつ、退会届を提出せぬままに会費を滞納した会員は、**滞納 3 年度目**をもって、理事会の議決により会員の資格を喪失させ除籍とする。

3. 災害に関連した会費の特別措置

災害救助法適用地域で被災された会員のご窮状をふまえ、「日本地質学会に届出の住居または勤務地が災害救助法適用地域に該当する会員のうち、希望する方」は当年度（もしくは次年度）の会費を免除いたします。希望される方は、学会事務局までお申し出ください。

（参考）内閣府 HP：災害救助法の適用状況

https://www.bousai.go.jp/taisaku/kyuujo/kyuujo_tekiyou.html

会費についてご不明な点がある場合やその他確認したいことがある場合は、日本地質学会事務局へお問い合わせ下さい。

（e-mail：main@geosociety.jp / FAX：03-5823-1156 / TEL：03-5823-1150）

(金融機関用)

令和 年 月 日

預金口座振替依頼書
自動払込利用申込書(収加)

私は、三井住友カード株式会社から請求された金額を私名義の下記預金口座から
預金口座振替によって支払うこととしたいので、預金口座振替規定を確認のうえ依頼します。

収納代行会社	三井住友カード株式会社 (旧SMBCファイナンスサービス)	振替日 (払込日)	6日・23日(金融機関休業日の場合は翌営業日)
--------	----------------------------------	--------------	-------------------------

(フリガナ)		申込人住所	〒
申込人名			☎

ゆうちょ銀行以外の銀行またはゆうちょ銀行のどちらか一方に記入して下さい。

ゆうちょ銀行以外の銀行	金融機関コード		支店コード		預金種目 (どちらかに○印)	口座番号 (右詰めでご記入ください。)
		銀 信 組	行 庫 合	本 支 出 張	店 所	
	(フリガナ)					金融機関 お届け印
	口座名義人	法人の場合は、社名、代表者 役名、氏名を省略せずご記入ください。				

お届け印(捺印)
ゆうちょ銀行を除く金融機関へのお届け印ですか
ご注意!

ゆうちょ銀行	(フリガナ)					ゆうちょ銀行 お届け印
	口座名義人	法人の場合は、ゆうちょ銀行へお届けの社名、代表者 役名、氏名を省略せずご記入ください。				
	種目コード	契約種別コード	記号(6桁目がある場合は※欄にご記入下さい)	番号(右詰めでご記入ください。)		
	166	301	0※			
払込先口座番号		00110-5-58830		払込先 加入者名	三井住友カード株式会社	

(収納企業使用欄)

収納企業名	一般社団法人 日本地質学会	料金等の 種類	会 費 等
契約者番号	委託者コード 18476000	顧客コード 000000	

—預金口座振替規定— ※ゆうちょ銀行払いは除く。

- 銀行(金庫・組合)に請求書が送付されたときは、私に通知することなく、請求書記載金額を預金口座から引落しのうえ支払ってください。この場合、預金規定または当座勘定規定にかかわらず、預金通帳、同払戻請求書の提出または小切手の提出はしません。
- 振替日において請求書記載金額が預金口座から払戻すことのできる金額(当座貸越を利用できる範囲内の金額を含む。)をこえるときは、私に通知することなく、請求書を返却してもさしつかえありません。
- この契約を解約するときは、私から銀行(金庫・組合)に書面により届出ます。尚、この届出がないまま長期間にわたり会社から請求がない等相当の事由があるときは、特に申出をしない限り、銀行(金庫・組合)はこの契約が終了したものとして取扱ってさしつかえありません。
- この預金口座振替についてかりに紛議が生じても、銀行(金庫・組合)の責めによる場合を除き、銀行(金庫・組合)には迷惑をかけません。

ゆうちょ銀行をご指定の場合は自動払込み規定が適用されます。

(金融機関へお願い)

この預金口座振替依頼書・自動払込利用申込書に不備がありましたら、不備返却事由欄の該当項目に○印をつけて速やかに右記不備返却先へご返送ください。

◎書類の流れ お客様→収納企業→三井住友カード株式会社→金融機関

金融機関使用欄	(不備返却事由)			
	1.預金(貯金)取引なし 3.印鑑相違			
	2.記載事項等相違 店名、預金種目、口座番号、 通帳記号、通帳番号、口座名義			
	4.その他()			
備考				
検印	印鑑照合	受付印		

取 扱 店 日 附 出

不備返却先
三井住友カード株式会社
Sライン口座振替係
〒550-0014 大阪府大阪市西区北堀江3-6-11

裏面のりしろ①

101-0032

切手
貼付

一般社団法人日本地質学会
二丁目八一五 井桁ビル内
東京都千代田区岩本町

裏面のりしろ③

氏名
住所

のりしろ①

のりしろ③

裏面のりしろ②

のりしろ②

線

線

一般社団法人日本地質学会倫理綱領

2003 年 9 月 19 日 日本地質学会総会制定

2009 年 12 月 5 日 一般社団法人日本地質学会制定 *

日本地質学会の会員は、科学的真理を明らかにする事を目的として、誠実かつ真摯に地質学および関連科学の研究・教育および調査を行う。その成果を広く社会に公表することにより地質学および関連科学の進歩普及を図り、もって社会の発展と人類の福祉に貢献する。会員は、基本的人権を守り、良識かつ品位のある行動をとる。

1. 科学者としての倫理：会員は、専門知識の向上および地質学と関連科学の発展を目指して自己研磨を図る。研究と調査においては、法を遵守し、社会的良識に従って行動する。科学的事実に対しては常に謙虚、誠実でなくてはならない。研究成果と技術上の知見を広く社会に公表し、公表にあたっては先人と他者の業績を尊重する。

2. 知的交流の確保：会員は、国際交流や他分野との交流を進めることを通して学術の向上を図るとともに、研究成果と技術上の知見が科学的に広く吟味・検証されるよう努める。

3. 人類と社会への責務：会員は、その専門知識と技術を適切に活用し、研究と調査の成果を広く社会に提供することを通して社会の発展と人類の福祉に貢献する。

日本地質学会

4. 地球環境への責務：会員は、地球システムの諸現象についての専門家として、地質災害の予知と防止、地球環境の将来予測、資源の適正な活用に関する情報を提供するとともに、専門知識を活かして環境の保全と改善に努める。自らの研究と調査の実施にあたっては環境への影響を最小限にするよう配慮する。

5. 次世代への責務：会員は、地質学と関連科学における学術と技術の継承と発展、次世代を支える人材の育成を図る。研究や調査の成果物、重要な露頭や標本などの科学的遺産の保全に努める。

*2009 年 12 月 5 日法人理事会において、一般社団法人日本地質学会倫理綱領として全文引継を決定。

